

第51回下越内科集談会

日時 平成22年11月19日(金)
午後6時30分～8時40分
会場 ANAクラウンプラザホテル新潟

一般演題

1 抗CADM-140抗体陽性を呈した間質性肺炎合併皮膚炎の1例

鈴木 達郎・朝川 勝明*・古川 俊貴*
小屋 俊之*・中山 秀章*・各務 博*
高田 俊範*・成田 一衛*・長谷川隆志**
鈴木 栄一**

新潟大学医歯学総合病院総合臨床研修センター

新潟大学大学院医歯学総合研究科内部環境医学講座呼吸器内科学分野*

新潟大学医歯学総合病院総合診療部**

症例は45歳、女性。2008年末～2009年初めにかけて顔面紅斑、関節痛、レイノー徴候、微熱が出現し、当科入院。皮膚筋炎が疑われるも筋炎症状に乏しく確定診断に至らなかった。皮膚・関節症状に対してプレドニゾロン20mgが開始されたが、外来でのステロイド漸減に伴って皮膚・関節症状が悪化し、当初から併発していた肺の間質影も悪化したため2010年7月再入院となった。臨床像からclinically amyopathic dermatomyositis (CADM)と考えられ、京都大学に自己抗体測定を依頼したところ、CADMに特異的な自己抗体とされるCADM-140抗体が陽性であることが判明した。また、亜急性に進行する間質性肺炎の病理学的検索を目的に胸腔鏡下肺生検を施行したところ、治療による可逆性が期待できる所見を認めた。CADMの診断で免疫抑制剤併用のうえステロイドの増量を行ったところ、肺の間質影は改善傾向を示した。CADM症例は筋炎症状を欠く、あるいは乏しいことから皮膚筋炎の診断基準にあてはまらず、本例のように診断に困ることがあ

る。CADM症例の診断・治療を考える上でCADM-140抗体は有用な検査と思われたので報告する。

2 皮膚に髄外病変を認めたinv(16)を有する急性骨髄性白血病の1例

柴田 怜・柴崎 康彦・森山 雅人
滝澤 淳・増子 正義・古川 達雄
鳥羽 健・相澤 義房

新潟大学医歯学総合病院第一内科

【序文】acute myeloid leukemia (AML) with inv(16)は、CBF β /MYH11遺伝子変異を有する白血病であり髄外病変を認めることが知られている。今回我々は皮膚腫瘍を認めたAML with inv(16)の症例を経験したので報告する。

症例は23歳、女性。2010年6月より右下腹部に小腫瘍が出現。徐々に増大すると共に、左腹部、両下腿、腰背部にも同様の腫瘍が出現した。7月下旬、検診で高度の貧血を指摘され近医を受診。末梢血中に芽球を認めたため当院に紹介された。来院時WBC 27060/ μ l、骨髄検査ではMPO陽性の芽球を55%認め、CBF β /MYH11遺伝子変異が陽性でありAML with inv(16)と診断した。皮膚腫瘍生検では白血病細胞の浸潤を認め、髄外病変と判断した。寛解導入療法としてDNR+Ara-C療法を施行し血液学的寛解に至った。現在大量キロサイド療法を基本とした地固め療法を継続中である。

【考察】AML with inv(16)は予後不良なAMLであるが、髄外病変をしばしば併発することが知られている。特に髄外病変のみでの再発例があることが知られているが、初発時より髄外病変を有した症例については報告例が乏しい。一般に髄外病変を認めるAMLは予後不良とされているが、AML with inv(16)において髄外病変が予後不良因子であるかについてはまとまった報告がない。本症例は遺伝子学的寛解が得られれば、骨髄移植は施行しない方針である。